

建設技術者のための この一冊

月刊「建設」では2020年3月号より新コーナーとして「建設技術者のためのこの一冊」の連載を開始しました。新旧の学術図書、隋筆、小説等を紹介します。会員の皆様の自己啓発、幅広い見識の形成等にお役立てください。

家康、 江戸を建てる

著者：門井慶喜

発刊：祥伝社

定価：1,800円（税別）



直木賞候補となった門井慶喜の歴史小説。5編からなる連作短編集。天正18（1590）年、秀吉によって家康は関八州に移封される。拠点と定めた江戸で、家康や家臣たちが見たのは、荒れ寺のようなお粗末な江戸城と見渡す限りの低湿地であった。第1話は「流れを変える」。伊奈忠次、その子忠治らが、東京湾に流れていた利根川を銚子に向けて東へ付け替える。いわゆる「利根川の東遷」である。利根川東遷の目的には①江戸を利根川による水害から守る。②埼玉平野から利根川を遠ざけて、その開発を進める。③舟運を開いて関東平野はもちろん東北と関東との経済交流をはかる。④東北の雄藩伊達に対する防備として、利根川をして江戸城の一大外濠とするなどの諸説がある。本書では、①の観点を中心にして物語が進む。

第2話「金貨を延べる」は貨幣の鑄造。

第3話は「飲み水を引く」。大久保藤五郎らが、井の頭から目白を経て小石川まで水路を開削し、さらに外濠に掛樋（上水専用の橋梁）をかける上水工事を行う。この神田上水や、その後の玉川上水などによる生活用水の確保が巨大都市「江戸」を支えていくことになる。

さらに、第4話「石垣を積む」で江戸城の石垣、第5話「天守を起こす」で江戸城天守閣の建設と続く。

現在の東京に続く都市「江戸」の基盤づくりに力を尽くした人々にスポットライトを当てた歴史小説である。